

副看護師長としてのご挨拶

副看護師長 河合佑美

はじめまして。2021年4月から医療福祉支援センターに配属され、退院調整看護師として働いています河合佑美です。私自身、これまでに急性期と慢性期での看護経験があり、今はそれらの知識を関連づけながら、日々やりがいをもって退院調整業務にあたっています。

病棟にいた頃は、退院支援に関わる患者さんの多くが、がん終末期の方々でした。正直に言うと、患者さんの病状やそれに伴う心理的变化、残されるご家族との関わり方がとても難しいと感じていました。実際、退院支援・退院調整を必要とするがん患者さんは、病状変化や治療経過、社会的背景などが複雑であり、そこでの関わり方を十分に考えながら介入しなければなりません。

そのような状況下、患者・家族の意思決定支援や自立支援に関わる場面が何回もありました。また、患者・家族が今後の療養先等を考えている折に、病気と向き合うことで生じる葛藤や揺らぐ思いを、何度も目の当たりにしました。病棟にいた頃は、こうした思いにきちんと目を向けることができないことも時にありました。さらに、そうした思いを感じながらも、自分自身がしっかりと関わらず、これでよいのかと感じることもよくありました。今は、医療福祉支援センターに所属する退院調整看護師として、患者・家族のそうした葛藤や揺らぐ思いにできるだけ寄り沿えるように心掛けています。そして、患者・家族が大切にしている思いをいかに地域に繋げられるか、一緒に考えていくことを大切にしています。

退院調整看護師として配属されて6ヶ月が経過しましたが、多職種との話し合いやカンファレンス等に参加する機会も増えています。また、地域のケアマネジャーや訪問看護師、在宅医等との連携・調整なども頻回に行うようになりました。一連の業務の中で最近気づかされたことですが、私は、患者さんを急性期病院で治療する人として捉えていたように思います。やはり、大切なことは、患者さんを地域で暮らす生活者として捉え、今の場面を点ではなく線(時間軸)でつなぎ、周囲との関わり等を含む面でケアすることだと思えます。

正直、退院調整看護師としてはまだまだ未熟であり、周囲の方々の力を借りて、患者・家族への支援がやっとな行えている気もします。その一方で、医療福祉支援センターに配属されて時間が経つにつれ、自分自身の視野や価値観が広がっていることに気づかされます。今後も、患者さんを地域で暮らす生活者として捉え、患者・家族にとって最善と思えるような選択(意思決定)を支援できるように、多職種との連携を密にして励んでいきたいと思えます。

あわせて、当該業務の遂行に必要な知識や経験等を積み重ねていきたいと思えますので、今後ともご指導のほどよろしく申し上げます。